

臨終の住まいの建築論

西村 謙司

A5判上製函入

本文二七八頁

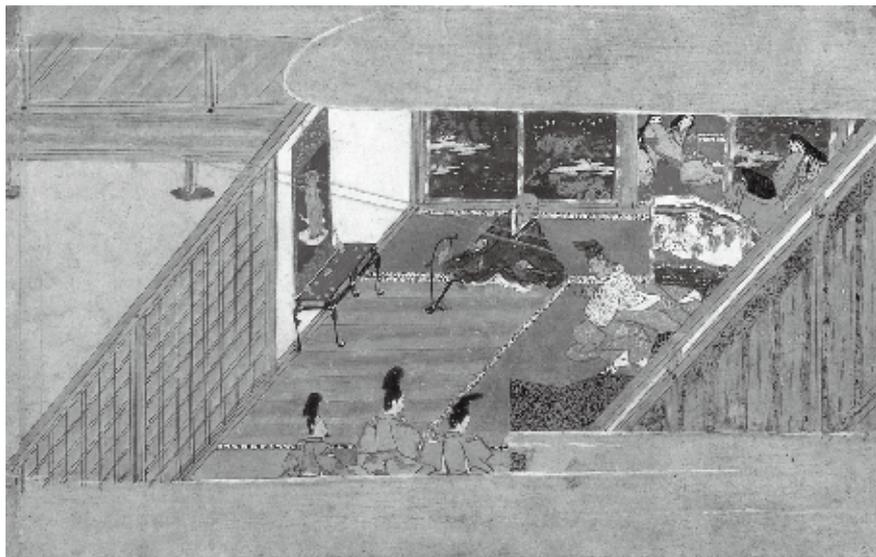
口絵八頁

挿図三八点

ISBN978-4-8055-0587-8

定価 二一、六〇〇円 (本体 二一、〇〇〇円 + 税)

野宮左大臣公繼 臨終場面 法然上人絵伝 京都・知恩院



本書の構成

第一部第一章では、『栄花物語』を読解し、「殿」（藤原道長）が臨終を迎える御堂を「建てる」時の様子を明らかにしている。臨終の場所を「建てる」時の動機、目的、方法を説明することを試みた論考である。

第二部は、三章構成とし、臨終の場所に「住まう」ことのあり方とその「場所」の構造究明を試みている。第二章は、第一章の論考を受けて、『栄花物語』巻三十（つるのはやし）に叙述されている殿の臨終場面を研究対象とし、殿が臨終の時に営んだ住まいのあり方とその諸場所の構造を明らかにしたものである。第三章は、『栄花物語』で語られた殿の臨終の住まいの原型を示している『往生要集』（臨終行儀）を解釈することによって、「臨終の住まい」の原理的究明を試みたものである。第四章では、形式化された臨終の住まいの事例として「臨終行儀」を取りあげ、『往生要集』を介して営まれた臨終の住まいの諸形式の特徴と形式化のあり様を明らかにするとともに、諸形式を通してみられる場所的特性を「臨終の住まい」の形式的特質として説明することを試みている。

第三部も、三章から成り、『往生要集』の臨終行儀をふまえて営まれたと考えられる住まいの諸事例を取りあげ、その個々について建築論的に論考を試みている。第五章は、『往生要集』以後の臨終の住まいの歴史的展開の様子を明らかにしたものである。第六章は、臨終の住まいの形式化という観点から、「迎講」の形式と内容、そして「迎講」の形式変化の様子を明らかにした。第七章では、形式変化をともなって史的に展開してきた迎講の集大成的な位置づけを担っている当麻寺の練供養の舞台空間の構造と建築的意義をその形と意味に着眼して明らかにしている。

以上の構成で、「浄土教建築における「臨終の住まい」の建築論的研究を試みている。

古来、我が国では仏教美術にみられる荘嚴の本質を死生の営みの問題として捉えてきた。本書は『栄花物語』、『往生要集』に記された「臨終行儀」や「迎講」を通して、臨終の住まいの史的展開と成立構造を明らかにした学際的研究の公刊である。

目 次

序 文

第一部 臨終の場所を「建てる」ということ

第一章 「心たくみ」ということ

序・一「心たくみ」ということ・二歌論に見る「心」と「たくみ」・三「心たくみ」ということ・結

第二部 「臨終の住まい」のあり方

第二章 『栄花物語』の場合

序・一法成寺「阿弥陀堂」について・二「殿」と「京極殿」・三伽藍構成と「院」の世界・四「殿」と「阿弥陀堂」・五「阿弥陀堂」における「殿」の臨終場面・結

第三章 『往生要集』の場合

序・一「念仏の場所」のあり方・二「念仏」のあり方・三臨終の住まい・結

第四章 臨終行儀にみる「臨終の住まい」の形式的特質

序・一臨終行儀の形式的特質・二臨終行儀の形式化・結

第三部 「臨終の住まい」の諸相

第五章 『往生要集』以後の「臨終の住まい」の展開

一『往生要集』と「臨終の住まい」・二横川首楞嚴院二十五三昧の場所・三靈山院釈迦堂と花台院阿弥陀堂・結

第六章 迎講の展開

一迎講の形式と内容・二迎講の形式変化・結

第七章 当麻寺の練供養

一当麻寺練供養の歴史・二当麻寺のトポグラフィ・三当麻寺の伽藍配置・四娑婆堂の空間構造・五当麻寺本堂の空間構造と意味・六来迎橋の空間構造・七二十五菩薩練供養における空間体験と舞台空間の構造・結

結 語

初出一覧・図版出典一覧・後記・索引

【著者略歴】

西村 謙司 (にしむら・けんじ)

1969年 広島県福山市生まれ

1992年 九州大学工学部建築学科卒業

1994年 九州大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了

1995年 日本学術振興会特別研究員

1999年 京都大学大学院工学研究科建築学専攻
博士後期課程単位認定退学

2002年 京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻
博士後期課程修了 博士(人間・環境学)

現 在 日本文理大学工学部建築学科准教授

建築意匠・建築論 専攻

2004年 日本建築学会奨励賞受賞

受賞論文：『栄花物語』にみる「心たくみ」の場所論的解明



当麻寺縁起絵巻(享禄本) 第七段 当麻寺練供養(部分)



当麻寺練供養 来迎橋を渡る二十五菩薩